

を使って亡くなった誰々とあそこで釣りをしたとか。フライを入れるボックスやリールケースも使い込むほど味が出る手づくりのものを選びますね」。東京都台東区で高級竹竿などを扱う「つるや釣具店」の山城良介さんは言う。「非効率性を旨とするフライフィッシングの道具は本来、大量生産と相性が悪い。職人の作品はシンプルな中にさりげないオシャレがあります」

1992年に公開され、日本にフライフィッシングブームをもたらした映画「リバー・ランズ・スルー・イット」ではブラッド・ピットら2人の兄弟が釣りを愛する牧師の父に育てられる。作品は「私の家では、宗教と釣りはふたつでひとつのものだった」というモノローグで始まる。ニジマスであれ、魂の救済であれ、すべての「善きもの」は神の恵みによって与えられるというのが作品

を貫く価値観だ。正確な4拍子で竿を振れるよう修練を積むのも、神の定めたりズムと調和するのに欠かせない通過儀礼なのである。

米国の宗教観や自然観を論じた「反知性主義」のなかでフライフィッシングを取り上げた国際基督教大の森本あんり教授は「釣り人が自己主張をせず、自然の中に溶け込むこの釣りは繊細な芸術。大自然の懐に抱かれ、太古から続く宇宙のリズムに身を委ねる魂の再生（レクリエーション）なのです」と説く。夕暮れの北海道・西別川。川霧が立ちこめる清流で釣り人が黙々とフライを投げている（表紙上）。自然と人間の対峙はない。川のせせらぎ、木々の緑、柔らかな日差し、釣り人があるべき場所に収まって、一枚の絵になっていた。

吉野浩一郎

鈴木健撮影